



TITLE:

[書評] 安藤信廣著「庾信と六朝文學」

AUTHOR(S):

原田, 直枝

CITATION:

原田, 直枝. [書評] 安藤信廣著「庾信と六朝文學」. 中國文學報 2009, 77: 127-146

ISSUE DATE:

2009-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/178026>

RIGHT:

書 評

安藤信廣著

『庾信と六朝文學』

原 田 直 枝

南山大學

文學は、言葉を介して生み出されるものであり、文學研究は、その言葉との取組みの連続である。そして、その取組みは、言葉の向こうにいる作者を多かれ少なかれ意識しながら行われるが、作者というものに限りなく肉薄しようとすれば、それは膨大なエネルギーの要る作業となるのは必然である。極めつきの修辭主義で知られる六朝文學においては、言葉は幾重にも練りこまれていて、その厚い修辭の層を解きほぐし、言葉の向こうにある作者の姿を捉えようとすると作業は、多くの研究者にとってたいへんな困難と

言える。しかし、内面に裏打ちされた言語表現こそが、文學としての生命をもち得る。六朝文學の過剰な修辭にたじろぐことなく、幾重にもめぐらされた言葉の層の向こうへと掘り下げていけば、そこには、やはりいつの時代の詩人と違わぬ「表現する自己」「表現する魂」が横たわっている。安藤信廣著『庾信と六朝文學』は、そうした取組みの困難さと魅力が窺われる一書である。

さて、この十年ほどのうちに、庾信研究をまとめた著作が次々と公刊された。これは、日ごろ六朝文學研究に携わる者ならずとも少なからず關心を寄せられる出来事なのではなからうか。まず、矢嶋美都子『庾信研究』（明治書院、二〇〇〇年）、そして、加藤國安『越境する庾信——その軌跡と詩的表象——』（研文出版、二〇〇四年）、さらに、本書。いずれも、詩人庾信に焦點を當て、そこに六朝文學或いは中國文學史上の大きな意味を解き明かす力作ばかりである。いったい庾信というのは、中國文學研究に携わる者にとって、だいたいユニークな素材である。六世紀梁に生まれ、

隋の成立と入れ替わるように没。その生きた時代も身に體した教養も、明らかに六朝詩人である。但し、梁初までの『文心雕龍』や『詩品』の成立、とりわけ『文選』編纂を一大頂點として手早く六朝文學史を結んでしまうなら、庾信は言わばほんの少しばかりそれらに「遅れてきた世代」として、やや宙に浮いて見えることとなる。しかしこれを裏返せば、大方の六朝詩人が、『文選』や『文心雕龍』『詩品』の「ふるい」にかけられるなかで、庾信の作品は、偶々「遅れてきた」ために、各種の選別にかからぬまま今日に傳わるのである。しかも、その作品は、六朝詩人のなかでも拔群のポリウムで現存している。質・量ともに、研究者にとってミステリアスかつ魅力的な素材であることは間違いない。實に庾信は、六朝文學の流れに「遅れてきた世代」などではなく、六朝文學の堂々たるアンカーなのである。

それだけに、庾信の文學をどのように解き明かすか、ということは六朝文學をどう説明するか、に結びつく。今や、文學史上で缺かせぬ存在となっている。また、庾信につい

てどのように解明するかは、その研究者が、六朝文學を、六朝から唐へと引き繼がれゆく中國文學の流れを、どのように跡づけようとしているか、を如實に示すものとなること、今や大方の認めるところとなっているのではなからうか。

とは言え、傳統的な評論のなかで長らく否定的な位置づけをされ續けてきた（本稿では詳細は省く）ぶんだけ、庾信の文學について本格的な研究がされるようになったのは一九七〇年代以降。ちょうど、六朝文學研究のすそ野の擴がりに歩みを並べるように、充實してきている。この十年間に次々と庾信研究に關する著作が公刊された背景には、庾信とその作品が、上述したような魅力的な素材であること、を、いち早く察知し、検討を重ねてこられた諸先達による功績がある。

ところで、一口に庾信と言ひ、六朝文學と言つても、切り口は多岐に互る。ことほど左様に、矢嶋氏書は、例えばその第四章に「庾信の作品の唐詩への影響」が立てられて

いるのに見られるとおり、庾信作品の唐詩への影響といったものを強く意識した研究姿勢を示す。また、加藤氏書は、現存する庾信の作品と傳記資料、周邊資料を徹底的に網羅し追求して庾信像を全面的に提示する姿勢を示す。從來、難解と言われ、そのために敬遠されがちであつた庾信の詩文理解への窗口を、幅廣い利用者に向けて開放した、その功績は大きい。そして、このほど刊行された本書は、その書名が示すとおり、庾信の文學を研究の軸として、これと關わる六朝文學についての論考を編集したものである。六朝詩人である庾信を、六朝文學の流れの中で讀み解くということ。ごく当たりまえと言えそうなこの作業が、實は意外にも難しい。

よく知られるとおり、庾信の詩文の風は、前半生と後半生とで大きく變わる。前半生のそれは、齊梁の文風を繼ぐもの、後半生には人生の苦澁をたたえたもの。前半生の詩文は同時代の文學の流れのなかで説明するのはむしろたやすい。問題は、前半生と後半生、それぞれの時期の作品の輪郭の相違。それをどのように説明するか。一人の人間か

ら生み出される言語表現として、どのような脈絡を見出すか。とりわけ、後半生の「一變」した文學を、これに先立つ六朝文學の流れ、或いは同時代の文學のなかでどのような脈絡として説明できるか、である。庾信とそれに前後する六朝文學との關わりの説明。その方法の可能性は、おそらく複數ある。差しあたり、本書で安藤氏は次のような姿勢をとられた。

庾信のこころみが單に孤立していたのではなく、三國・六朝時代を通じて底流として流れつづけていた問題を、重くうけとめたものであることを、述べようとした（「前言」）

ここで、「こころみ」とは、「葛藤的思索を背景に、文學的表現方法を嚴しく問いつつ、みずからを現實にむかつて立たせていった過程」であると、安藤氏。また、次のようにも述べる。

本書は、六朝の、特に六朝後期の文學が修辭への過剰な偏重を示しているということを認め、内容よりも修辭が、思想よりも言葉が重視された事實を認める。

そのうえで、修辭への偏重というこの事態を、同時代の精神史的課題と深くかかわるものとしてとらえる立場に立つ。(同前)

庾信後半生の文學のなかの内面的葛藤を表わす作品群を、三國・六朝全般の流れを受けたものとして捉える。「言葉へのこころみ」として一貫させて論じ、庾信後半生の文學が、「精神的體驗」に裏打ちされたものであることを、忍耐強く論證していくのである。この見方を支えると思われる、示唆を含む説が、かつてあった。

六世紀、南朝末、南北の對峙した政治の紛争は、庾信をはじめ多くの亡國の詩人をうんだ。その混亂は、詩人たちにとっては不運であつたが、文學にとっては、その形式の華麗さのかげに久しく失われつつあつた人間の心情を復活させる契機となつた。(高橋和己「中國詩史梗概」、一九六二年。のち『高橋和己全集』卷十五)

こうした姿勢のもと、庾信の文學に通じる、三國・六朝期の表現者として本書に取りあげられる詩人は、先驅けは、王粲、阮籍、陶淵明、謝靈運の四家。同時代は、薛道衡、

江總、顔之推三家、それに北周王族。その各種詩文に即して、難解な修辭に覆われて見えにくいとされてきた、言葉の操り手である六朝詩人と、その言葉とのつながりについて、追求するとともに、作品に見られる内面的な諸要素を、内面に裏打ちされた言語表現こそが、文學としての生命をもち得ること、さらには詩人がその自己を言語表現によって救われていくさまについて、解き明かすのである。

* * *

本書は、序論と第一―三部の四部構成となっている。はじめに目次を全て掲げるべきかも知れないが、各章・各節の見出しは、そこで述べられる内容をよく示すものでもあるので、目次は序論、第一部、第二・第三部の三つに分けて示し、その概要についてそれぞれに紹介することとした。まずは序論から。

序論 三國・六朝文學の課題

第一節 王粲の文學——宮廷詩人と流民の視座

- 一 三國・六朝時代と文學
 - 二 曹操政權の宮廷詩人
 - 三 「七哀詩」の世界
 - 四 流民の視座
 - 五 倫理の無根據性
 - 六 流民と倫理
 - 七 結論——流民と宮廷詩人
- 第二節 阮籍「詠懷」詩の自我構造
- 一 唯一の登場人物
 - 二 矛盾する言説の意味
 - 三 見ることへの固執
 - 四 時代との緊張

序論に立てられた二つの論考は、本書所収のなかではとも比較的最近のものである（二〇〇七年、二〇〇二年）。それぞれ王粲、阮籍について検討するうちにも、第一部以下、とりわけ第二部庾信論の足場を拓くことを意識した論述が認められる。

書 評

確かに、庾信後半生の詩文の語彙、構成のなかには、建安七子や魏晉文學との對比を要する事例が少なくない。これは、詩人が置かれた社會的状況と不可分ではない。後漢末の戦亂收まらぬ魏初と、侯景の亂によって引き起こされた南北入り亂れ覇權を爭う混亂の世。その相關を、著者は「三國・六朝は、精神的流民の時代だった」と述べ、この時代の詩人たちが「そのことによって倫理的無根據性を體驗」（三三頁）したことを重視する。そうして、この時代状況を切實にうけとめ、言葉に寫そうとするとき、詩人は「既成の倫理をなぞるのではなく、言葉によって新たな理念や美を生み出す」（三六頁）ということが、著者の確信として示されている。

第一節は、王粲を以て、宮廷詩人における「流民的視座」というものに着目し、三國・六朝時代の詩人の原點として位置づける。「七哀詩」を材料として、そこに、王粲の「精神的體驗」としての「非倫理性」、そうした「自己の非倫理性を凝視していること」（三〇頁）を辿り、それら「體驗」が、やがて「集團」の「行爲の意味を發見し表現

する」ことを本領とする宮廷詩人（二〇頁）として、曹操宮廷における王粲の文學に強く結びついてゆく、と説く。王粲の文學は樂府的要素など多様な側面を備えたものだが、本節は、本書の序論として論點が極力絞りこまれたものとなっている。

第二節、阮籍の自我とその「詠懷」詩八十二首の表現との深い結びつきについては、詩人の精神と言語表現の結びつきに關心を注ぐ本書に必須の検討材料である。庾信後半生の「擬詠懷二十七首」を筆頭に、それと類似的精神的課題と言語表現との關わりを辿るうえでも、本書において避けて通れぬ詩人および作品である。

* * *

六朝の中から、著者は東晉・宋の間に目を向ける。

第一部 東晉・宋代の詩人

第一章 陶淵明の文學

第一節 「形影神三首」詩と佛教

一 形・影・神分立の意味

二 形と影の「惜生」

三 「神釋」の位相

四 「形影神三首」と贈答詩

五 「卽事」と「卽理」

六 慧遠・白蓮社と陶淵明

七 事象の凝視

第二節 「雜詩十二首」における死生觀

一 時間との葛藤

二 時間との軋轢——死生の相克

三 「人生」と「歲月」——生への逆轉

四 死と生の往還

おわりに

第二章 謝靈運の文學

第一節 謝靈運の資性と詩

一 謝靈運の時代と佛教

二 謝靈運の資性と時代狀況

三 謝靈運の〈山水詩〉と哲理

四 紋景と謝靈運の内面的契機

五 紋景表現と精神的救済

六 玄言詩からの飛躍

第二節 謝靈運の「山居賦」の構造と佛教

一 「山居賦」制作の経緯

二 「山居賦」の概要

三 山居の動機

四 紋景による解放

五 外に向かうまなざし

六 紋景の方法と佛教

第一章、陶淵明をめぐることは、「形影神三首」と贈答詩・「雜詩十二首」が取りあげられる。それらの検討を通して、淵明の「精神的態度」（二七頁）を捉えようとしている。「形影神三首」を論じる節では、この詩の問答體形式が、陶淵明の独自の死生觀に關わる思索と不可分であることにも、著者のこだわりは向けられている。一方、第二節では、「（人間と時間との葛藤）」、中でも「人間と時間と

が單に葛藤するだけでなく、軌轢をひき起こし、人間が敗北」（二〇一頁）する跡を導きだし、淵明における死への思索と生の思索——「陶淵明の思索の往還」と著者は呼ぶ（二七頁）——、「人生」の無根據性」をつきつめた言語表現として「雜詩十二首」を捉えてみせる。

第二章、謝靈運をめぐることは、「撰征賦」と「山居賦」の解讀をメインに、謝靈運における佛教思想（老莊思想との關わりについてはあまり踏み込まれない）とその山水文學における言葉との關わりが追求されている。

ところで、謝靈運と庾信という取合わせは、どうであろう。文學史で兩家が項目として並列されるのはよくあることとして、これを關連づけて説くとなると、少し脈絡を考えざるを得ないのではないか。しかし、著者は、作品の表面はたまた内容だけ比べたらわかりにくいようなその脈絡を示すのである。それは「言語表現が詩人の新たな内面（認識）を開く」というところに係る。

例えば、「山居賦」の膨大な紋景表現について、靈運にとって山居そのものが自己の超克のためであるばかりでな

く、その場における表現も、より強い自己超克の行爲であり、表現によつて、煩悶しつづける自我の救済を實體化し得た、と説く（一六二頁）。本書「前言」で「山水美を表現することが、新たな認識を開いてゆくのである。…（略）…美の表現が思想を開くという關係である」と述べるのは、これと同趣旨であらう。

なお、「山居賦」は、膨大詳密な自注を附帶して傳わる。いかにも目を引く自注の意義について、あまり關心が拂われていないのは、疑問である。

* * *

第二部と第三部は、庾信その人を扱うのとその周邊を扱うとの違いはあるが、まとめて見たほうがよい。

第二部 庾信の文學

第一章 庾信の前半生の文學

第一節 前半生の銘と賦

はじめに

- 一 前半生の銘
- 二 庾信の銘の特質
- 三 前半生の賦
- 四 交錯するものがあり

第二節 南朝時代の詩の特質

- 一 庾信文學への二つの評價
- 二 庾信の南朝時代の詩作品
- 三 對句内部の喚起力
- 四 庾信と蕭綱の作風の差異
- 五 他者への想像力

第二章 「擬詠懷二十七首」の方法

第一節 「擬」と「詠懷」の方法

- 一 庾信の後半生と「擬詠懷二十七首」
 - 二 「擬」の文學的意味
 - 三 「詠懷」という行爲
- #### 第二節 庾信「擬詠懷二十七首」の方法
- 一 庾信の文學的試み
 - 二 「擬詠懷」の必然性

三 徒勞の營爲としての「擬詠懷」

第三節 「擬詠懷」における自己像の形成

一 解體からの出發

二 使者の形象

三 時代との相關

第四節 詠懷と敘事

一 敘事的表象

二 「哀江南賦」との對比

三 敘事の意味

第三章 後期の賦の特徴

第一節 「竹杖賦」における再生への希求

一 庾信の賦の變容

二 自敘體と問答體

三 桓溫の責任

四 生民の立場

五 死と再生

六 勝者と敗者の語彙

七 歴史の極北

書 評

第二節 「哀江南賦」の表現構成——歴史と招魂

一 庾信と天臺智顗

二 「哀江南賦」の特徴

三 序文の意味

四 豫兆と現實

五 江陵の陷沒と豫兆

六 招魂という行爲

第四章 後期の庾信とその文學的立場

第一節 「擬連珠」四十四首の表現と論理

一 「擬連珠」四十四首の出發點

二 「擬連珠」の先行研究

三 歴史的過去への注目

四 感覺的自己把握からの脱皮

五 自己を動かす論理

六 「擬連珠」評價の次元

第二節 庾信と北周滕王

一 『庾信集』の編集と「謝滕王集序啓」

二 滕王の評價と庾信の感謝

三 滕王への贊美と困難な時代

四 庾信の歴史認識

五 庾信の内的矛盾

六 自己と他者の立地點

第三部 庾信以後の六朝文學

第一章 北周王族の文學と思索

第一節 北周趙王の文學——聖武天皇『雜集』を資料として

料として

一 北周趙王と聖武天皇『雜集』

二 北周の文學動向と趙王

三 聖武天皇『雜集』の資料的價值

四 趙王の「平常貴勝唱禮文」

五 趙王の文章の特徴

六 趙王の思索態度

第二節 北周趙王への庾信の影響

一 問題の所在

二 趙王「道會寺碑文」の調査

三 庾信と趙王の語彙の共通性

四 梁簡文帝から北周趙王への影響

五 結論

第二章 「羈旅の臣」の文學

第一節 江總の文學

一 江總の「自敘」

二 三人の「秋日遊昆明池」詩

三 亡國のイメージとしての「羈旅」

四 政治への道——薛道衡

五 文學への固執——江總

六 「羈旅」の詩人群

第二節 顏之推の文學——「觀我生賦」を中心に

一 顏之推と文學

二 「獨生」と「獨死」の矛盾

三 天への詰問

四 人間の相貌

五 「天真」への注目

六 思索者としての自立

* * *

第一章は、南朝時代の作と推定される銘、賦、それに宮體の詩を材料として、南朝の「綺麗」な文風を代表する詩人であった庾信が、後半生、自己の内面に密に關わる内容の文學を生み出すに至る素地「資性」の把握がなされている。一九九八年の論考にもとづく。

梁時代の庾信の銘については、場面を同じくして作られたことが豫測される皇太子蕭綱（簡文帝）の同題作との比較も交え、銘という文體のなかで「ことばの喚起力を呼び起こすことにつとめ、表現の官能性」と假に名づけられるような、つよい實感をひき起こす表現をうみだした」（一九〇頁）ことを導き出している。

賦については、現存する十四篇中、前半生の作と考えられる七篇（「春賦」「七夕賦」「燈賦」「對燭賦」「鏡賦」「鴛鴦賦」「蕩子賦」）から、「對燭賦」を主に、その他の作の一部を織り交ぜて検討が行われている。

中で、庾信の典故の用い方について著者は次のように述

べる。

ただ南朝時代の庾信にとって典故への固執に意味があったとすれば、それは一つのものがたりがつねに數おおくのものがたりと交差して成りたつているという視點をそだてたことだろう。一つの體験がかかえこまざるをえない多義性を、庾信は典故を用いることによつて學び、またそれを介してみつめた。それがまだつたないころみだつたとしても、典故にこだわる梁朝の耽美主義のなかで、それを體験のかかえる多義性の表現方法へ向けかえようとするうごきが、彼のなかにはある。（一九五頁）

別の箇所では、庾信の典故について「典故の多用を裝飾に終わらせるのではなく、人間のありようを重層的にとらえる契機にしようとするきざしを、ここにみることは可能である」（二九八頁。傍點は評者による。以下同じ）との把握も述べられ、庾信の典故が「重層的な表現」として成功しているという見方は、評者も同意するところである。庾信の文學の特徴は、何と言つても用いる言葉の重層性にある。

しかし、「典故への固執」が「視點をそだてた」、「一つの體驗がかかえこまざるをえない多義性を、庾信は典故を用いることによって學び」云々については、なおも直ちには肯い難いものを覺える。

宮體の詩（第二節）についても、銘に對すると同様、皇太子蕭綱の作品との比較という手法をとり、宮體の申し子と呼ぶべき庾信が「宮體詩のながれにのり、その極點にまでゆきついたうえで、そのながれの限界をこえようとしはじめている」（二三三頁）ことを説く。小項目の題にも見える「他者への想像力」という視點は、面白い。

第一・二節を通じて、著者は梁朝時代の庾信に「梁朝の文學の現状をつきぬけようとする」（二九九頁）在り様を、隨處で見出している。それについて呈された「きざし」（一九八頁、前掲）、「こころみ」（二九九頁）、「南朝時代の彼の表現の試行」（二二八頁）といった語が目を引く。

*

*

*

後半生の文學のうち、「擬詠懷二十七首」をめぐる第二

章の初出は、一九七九年である。第一節では、「擬詠懷」の「擬」の捉え方がまず問われ、庾信の「擬」が六朝の「擬」の傳統を逸脱・逆轉する行爲であることが説かれる。また六朝の「詠懷」が、日常的な感慨の表現ではなく、内省のはてにたどりつく自我を表出するものであることが確認されている。

第二節は、阮籍「詠懷」詩に對する庾信の獨自性を檢證している。其一、二十四、二十五を通して、「阮籍をめぐるキーワード「俗」の問題をたどり、庾信は「俗心」を持つ側に立つ、という對比を見出す。

これに其七を交えて、本節後半では、「精神的崩壞の危機」という語句が目立つ。「庾信が直面していたのは、精神的な解體の危機だった」（二五九頁）、「庾信は、長期にわたって精神的な崩壞の危機にさらされていたといわなくてはならない」（二六〇頁）、「自己存在が基盤そのものから崩れてゆく状況のなかにある。」（二六二頁）等々。これをもとに、次節で、同じ「擬詠懷」における「自己像の形成」「解體からの出發」が辿られる。

生きる根據を持たない生を生きる状況に、庾信は向きあつていた。換言すれば、自己の生の具體的背景を語り得ない、語ることを封印してしまった自我に、庾信は向きあつていた。そうした自我と、その具體的背景とに、わずかに言及したのが其二十一であつた。

(二八六頁)

「擬詠懷」其二十一は、著者が後半生の庾信について繰り返し強調する「無根據性」の論據の一つとおぼしい。ほぼ十頁を費やして、その第三・四句「避讒猶采葛、忘情逐食薇」をめぐる議論（『詩經』鄭玄箋の検討に發する第三句の検討に「食薇」の検討）を中心に、細心な検討を行なうなかで、「忘情」の語の由來や意味についてはあつさり「人の情を忘れる」という譯になつてゐる。「人の情」という語は、現代での意味合いとの差異も踏まえ、用いるのに注意が必要ではないか。二七八頁には「人臣としての情を忘れ」とある。「忘」という語も、「亡」に通じ、著者が重視する、異國の祿を食んでゐる自分に對する庾信の責めの氣持ちを、よりくつきりと照らしだす表現である。

書 評

第四節で、著者は「天道」に、語り手は向かいあおうとする。對象に向かつて語り出す。つまりモノローグをふりきつて、ダイアローグに出ようとする。その境界まで、「擬詠懷」は進んだ」（三〇二頁）と説く。次章で、問答體をとる「竹杖賦」に關する論が展開される、その布石と考えてよい。本書では、庾信の後半生が、精神的崩壞の危機、再生への希求、歴史と自己との對峙、と次第に精神的に「解放」されてゆく過程を描いたかのように整然と排されている。しかし、各作品はそもそもそのように順序だてて讀むべき關係にあるのか。そのような脈絡を想定してよいのか。氣になるところである。

* * *

第三章では、後期の庾信の、内面に關わる文學の主要なものとして、賦を論じてゐる。著者は、後期の賦が、その語りの形式によつて自敘體と問答體の二種に分けられるに着目（第一節一二）、問答體の代表として「竹杖賦」をとりあげてゐる。

問答體という形式について、「精神的に重い打撃を受けた庾信は、過去の體驗を直接語れなくなっていた」（三一四頁）と見る著者は、「語り手が自己のすがたを他者との問答を介して明らかにする」（同）このスタイルが、そうした庾信にとって重要であり、問答の形式で語る「竹杖賦」では、その表現をとおして、庾信が「自己のすがたを冷静にとらえ、…（略）…再生の足がかりを得ようとしている」（「前言」）という意味を見出している。

但し、第一節の三から四にかけて楚邱先生の言「惟我生民」をもって「何よりも、私は人間なのです」と譯し、「生民」を「人間」と解するが、漢のころから存在した形象である楚邱先生が自分を「人間だ」と言う設定は果たして可能だろうか。「人間」という言葉は、現代的すぎて、六朝の作品の解釋にそのまま取り入れるのには違和感を覚える。論考中の言葉を充てるなら「ただの人」（三二〇頁）もしくは「民草」と解するのが穩當ではないか。

また、本節の主な論旨を左右するものではないが、導入部でとりあげる「七夕賦」の十一句目を、原文「此時併捨

房檻」として扱っておられる。「檻」は「櫳」と作るべきではないか。「房櫳」と熟した例として、班婕妤「自悼賦」に「廣室陰兮帷幄暗、房櫳虛兮風冷冷」（「漢書」外戚傳下）があり、また、謝惠連「七月七日夜詠牛女詩」（「文選」卷三〇）に「落日隱欄檻、升月照簾櫳」とあるのは七夕にまつわる用例として、この賦の内容と無縁ではない。

* * *

第二節は、本書を構成する章節で唯一の新稿である。自敘體の賦の代表として「哀江南賦」によって、庾信の内面と言語表現をめぐる検討が行われる。僧智顗に觸れるくだりは、導入的なもの。まず、賦序に庾信の煩悶が反映していることを論じ、著者は、この賦序を以て「庾信は「擬詠懷」でも「擬連珠」でも自己を明瞭に事實の文脈の中で語っていない。語れなかったのだ。しかし「哀江南賦」序では、それを語っている」（三四六頁）と言われる。それは「詠懷詩」、「連珠」、「賦」序それぞれの文體に伴う、必然的な相違であったと見ることもできよう。

賦本體については、歴史記述としての嚴密さと批判性を持つことに庾信が力を注いでいる、とする一方、賦を構成する膨大な語のつらなりについては、「單なる事實の羅列ではない。獨自に事實を再構成し、かずかずの豫兆と、豫兆のもとでの人間の行爲の對比を劇的な構造」（前言）であることが分析されている。評者としては、この「事實の再構成」「かずかずの豫兆」表現のために取り込まれた、歴史的時間の層をたたえる言葉の役割というものに、もっと積極的に目が向けられてもよいように思う。

本節後半では「招魂」の意味が分析され、著者は、「哀江南賦」を賦することで「庾信は自己の外に出られた」（三六二頁）と見、この賦を「過去に呪縛されていた自己をこえ、過去と現在を正視し、現實にむかつて自己をおしだしてゆく。そこにこの賦の本質的意味がある」（前言）と結論している。

「哀江南賦」は、いずこに向けて歌われるものだったのだろうか。誰が受けとめるものだったのだろうか——これは、後半生の賦ほとんどにまつわる問題でもある。前半生の賦

が、おそらく宮廷での公表を前提に作られたものであるのに對して、後半生の作品についても、その公表の場、表現世界を共有する相手というもの（それとも、内面的述懐の詩と似て、個人的に書かれ、私藏されたのだろうか）を考慮してみることが、多少必要ではないか——。そして、何ゆえ、その後歴代の詩人たちをして、王朝交替の戦亂に遭遇する都度、思い起こさせ、これを模した哀歌製作の動因とされることになったのだろうか。「哀江南賦」が庾信の自己自身を「社會的存在として把握しなす」行爲であった（三六二頁）と位置づける本書では、「哀江南賦」の、作者庾信における意味が追求されたわけであるが、「哀江南賦」という大賦は、まだまだ各種のアプローチを受け容れそうである。

* * *

前にも述べた通り、庾信の詩文（本書ではあまり検討に組み込まれていない無韻文も含む）の特長は、そこで表現する内容・對象に應じて、それを表わす一つ一つの言葉の背後

に廣がる、その言葉の歴史（意味）を纖細に感知し、アレ
ンジし、取り込んでいるところにある。「擬詠懷二十七
首」にしろ「擬連珠四十四首」にしろ、庾信の内面を表わ
す内容を持つ連作中に認められる幾つかの自己像は確かに
興味深いものであるが、一方、そうやって語られる自己像
のために驅使されている言葉の多様さ、その重層性。それ
を重視した場合、言葉によつて語られる自己像を、それを
操る庾信自身と一致するものと意識することは、言葉の層
を讀み解くうえでむしろ制約となるのではないか。そもそ
もまた、果たして六朝期の詩文は、そこに語られた自己像
や、詩人を取り巻く世界像に、それを語る詩人——例えば庾
信——の等身大を窺い得るものであるのか。本書の庾信論を
辿りながら、氣になったことである。

*

*

*

第二部第四章第二節と第三章第一章とは、北周の王族滕
王、趙王における文學への関わり方について詳細に検討す
る點で共通し、その中で、滕王、趙王それぞれにおける、

庾信文學の受けとめかたも跡づけられている。滕王につい
ては、王による『庾信集』の編集と庾信「謝滕王集序啓」
とを對比させて、兩者の言語表現上の関わりが検討されて
いる。

趙王については、日本に伝えられた「周趙王集」を資料
として、趙王の文學と思想の特徴について考察している。
單に、庾信から受けた影響を窺うことに限定せず、趙王の
文學自體を分析する、という姿勢とその成果は、六朝末以
降の、文學・文化における複雑な南北融合の展開を對象と
する研究のなかで、大いに參考とされるだろう。

*

*

*

第三部第二章は、梁末から隋初にかけて、梁朝滅亡に際
會し、庾信と同様の流寓を體驗した詩人たち、所謂「羈旅
の臣」の文學をとりあげる。第一節は一九七六年、第二節
は一九七七年の論著であり、本書の原點であるかも知れな
い。著者は「庾信の遺したものとの関わりのなかで」（四
六八頁）の検討であると位置づけるが、六朝末から隋にか

けての、南朝系詩人たちにおける文學の動向についての取組みをいち早く行なった事例としての意義は大きい。

第一節では、江總の詩の分析を主に、薛道衡の詩についての分析を交える。江總について「癒されぬ傷に文學の場で對峙することから人間存在の本質に接近し得た」（四八四頁）と言ひ、また、「庾信の後を承けて「羈旅」という文學的形象への執着を共通して示す彼ら（＝梁・北齊・陳等の王朝の遺臣である詩人達。評者注）は、何がしか江總と共通する文學的試みをしたように見える」（四八五頁）、と述べるのは、先立つ章節で庾信その他の六朝詩人の作品分析で導き出される、著者の詩人理解と一貫したものである。唯だ、薛道衡についても「かつて負った自己の倫理的傷を見つめつづける」（四七七頁）視點を見出しているが、材料とした「敬酬楊僕射山齋獨坐」詩だけから、こうした結論を導くのは、少々強引な氣がする。

第二節は、顏之推における思索と文學の關係が検討されている。顏之推の代表作「觀我生賦」は、つねに庾信「哀江南賦」に對比される作品だが、著者はこの賦と他の詩と

の比較から、「獨死」と「獨生」という相對する語に着目、この矛盾する概念の間での精神の振幅につき動かされた言語表現の軌跡を「觀我生賦」のなかに見出す。

ところで、「觀我生賦」について、庾信「哀江南賦」との比較のなかで必ず注目されるのは、詳細な自注が附された作品ということである。著者は、この特長にあまり關心を向けておられない。第一部の謝靈運「山居賦」に關する節でも、同様の點が氣になった。詩人の自我、内面と言語表現の結びつきというものに格別に意を注ぐ安藤氏であれば、韻文と詩人の内面のつながりを繙くガイドとも言える自注について、何らかの言及があってもよさそうなものがある。

なお、四九五頁から四九七頁にかけての間に、「觀我生賦」の四句「民百萬而囚虜、書千兩而煙燭。溥天下、斯文盡喪」が、原文・訓讀とも重複して掲げられている。その解釋を示す本文との對應を見る限り、最初に示されたものだけで足りるのではないか。

* * *

庾信に限らず、六朝詩人たちの間を貫く流れとして「言語表現によって内面を開かれてゆく」詩人を跡づけ、言語表現による自己救済、自己開拓とでも呼ぶべきものの検証に取り組む本書の姿勢は、誰しも真似できるものではない。銓ずるところ、修辭主義とは、「何を」述べるかより、「如何に」述べるか、を重視する姿勢を指すであらう。しばしば、その「如何に」を追求し解き明かそうとするあまり、詩人の内面への配慮をおろそかにしたり、或いは、「如何に」の追求に目をつぶったりする。しかし、本書は、その「如何に」述べるかに傾倒する詩人たちの内面こそが、修辭主義文學を必要とした、ということこそ惜しみなく示そうとしている。

本書でとりあげられている詩文は、「序論」の王粲「從軍詩」「七哀詩」、阮籍「詠懷詩」を除いて、概ね『文選』の收録対象とはならなかったもののばかりであることに氣づく。庾信の作品がそうであるのは當然として、文學と詩人

の内面・自我という普遍的な問題を追求することに徹している本書は、六朝文學と『文選』の、興味深い關係をもあぶり出しているかも知れない。

ところで、卷末に「初出一覽」が附されるとおり、本書は、第三部の「哀江南賦」をめぐる章以外は、すべて公刊済みの論考を編成したものである。本書の背景に流れる三十年という時間は重い。このように、既發表論考を集大成した著作であれば、章節を成す論考一つ一つが、既に多くの研究者の目に觸れ、何らかの反響を寄せられた経緯が當然豫想される。その折々に行われたと同様に評することが、本稿の務めでないのは明らかである。個々の論考に、それぞれの掲載誌において接するのと、こうして一冊に、一つの趣旨のもとに排列しなおされた形で接するのでは、それぞれの論考がもたらす意味も違ってくるだろう。評者としては、明快な趣旨のもとに一堂に集められた總體としての本書から読みとり得るメッセージについて些かなりとも受けとめ、今後なお六朝文學、中國文學研究に携わってゆく者の一人として、その恩恵を正しく將來に繋いでゆくべ

く、本書を読み解くということに努めたつもりである。

この間を通じて絶えず持った疑問が、二つある。それら過去の反響、また初出から本書編集までの間に現れた他の成果に對して、著者はどのように應じられたのか、ということである。收録論文のうち初出年の最も早いものは、一九七六年（第三部第二章第一節に相當）である。現在に至るまで三十年餘。その間の、六朝文學研究の進展のめざましさ、層の擴がりを思えば、それが本書にどのように反映されているのか、ぜひ知りたいところである。

また、本書全般にわたって、隨處で頻用されるキーワードが幾つかある。本稿引用中にも繰り返し認められる語句が幾つかあるが、例えば「自我」、「超克」、「凝視」、「試み」、「主體的」、「とらえかえし」をはじめ「一かえす」という表現等。一連のキーワードは、著者の、文學に對する關心の所在を表わすものと見えるのだが、その種明かしを、うかがってみたいと思うのは評者だけであらうか。

* * *

一海知義「文選挽歌詩考」に、陶淵明「挽歌詩」をめぐり、次のような發言がある。

陸機の時代をへて、あいもかわらず大部分の詩人がことばのあそびにふけていた時に、淵明がきわ立つて平易な造語を行つたことに意味がある（『中國文學報』十二冊、一九六〇年。のち「一海知義著作集」卷2、二〇〇八年）

この「ことばのあそびにふける」という表現は、六朝期の修辭主義文學に對する捉え方の一面をよく表していると思われるのだが、本書で取りあげられた詩人とその作品には、まさに六朝の時代にありながら、「あそび」でない、「ことば」との格闘を演じた跡が、窺い得る。ただし、本書もタイトルに掲げる「六朝文學」という枠組みで考えるならば、「ことばのあそびにふけ」り、修辭の美に耽溺していると見られてきている詩文の何と多いことか。取組むべき六朝文學の地平は、まだまだ廣く、果て知れない。

（創文社、二〇〇八年十二月、五四〇頁）

附 記

二〇〇九年三月十四日、東京・二松學舍大學で開催された六朝學術學會例會において、「自著を語る」というタイトルのもと、本書について著者安藤氏が語り、評者が本書についてコメントを述べる役割を務める、という企畫が持たれた。當日やむを得ぬ事情により、評者がコメントを述べたその後、安藤氏のお考えをうかがう時間を持つことが叶わなかったのは残念であつたが、こうした、なかなか得難い機會に際して、過分に重い役割を務めさせていただいたことに、感謝申しあげる。